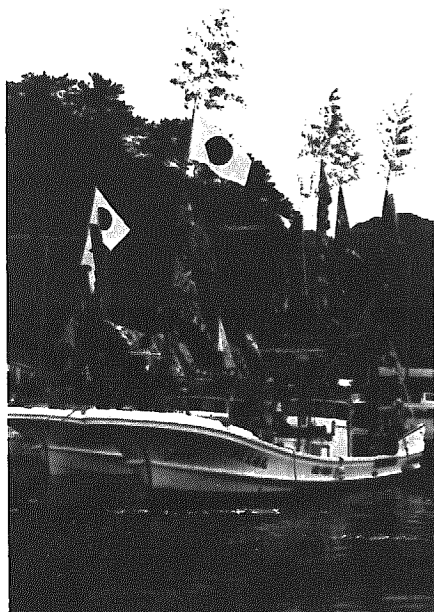


漁業ミニデータ

項目	52年	53年	54年	55年	56年	57年	58年	59年	60年	61年
水揚量(トン)	368	325	314	277	260	260	238	191	188	284
水揚金額(万円)	10,700	11,800	11,900	12,700	13,100	13,200	11,900	13,500	13,600	16,500
登録動力船数 (総トン数)	33 (78)	31 (75)	32 (78)	33 (78)	35 (78)	31 (69)	40 (81)	38 (76)	35 (74)	34 (72)
漁協正組員数	86	82	81	84	86	81	86	73	73	73

資料：港勢調査（農政課調べ）



毎年6月1日に行われる漁船の海上パレード。船は大漁旗などで美しく飾られる。

思うのですが……と、港が漁業者にとって、もとも基本的で大切なものだと言語間瀬漁業協同組合の組合長である本間儀一郎さん（間瀬七区・62歳）。

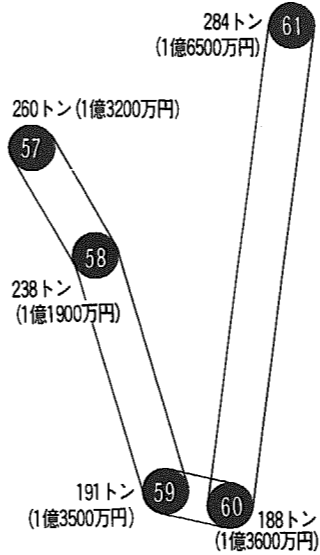
さらに漁港整備の遅れが間瀬の漁業の伸び悩みを招いていた一因ではないかと分析します。

それは、海という大きな受け皿があっても、それを活用する手段——この場合は、港の整備が遅れたことが、沿岸漁業資源の減少とともに間瀬漁業の活性化が一、二歩遅れたことへの要因の一つにあげられるからではないのでしょうか。

農業に置き換えて考えてみると、漁業を営む人たちにとっては、港は農地に似たものであり、それが整備されなければ、米や野菜などを効率よく収穫することができないのと似ているということではないでしょうか。

年間水揚量の  
移り変わり

(昭和57年～61年)



出漁日の午後4時からセリが始まる。港に活気があふれるときだ…

新たな道を求めて——海に生きる

間瀬漁業はいま

海——とつてもいい響きですね。海というと、みなさんは海水浴や釣り、ボート遊びといったレジャーの場というイメージが強いんじゃないでしょうか。しかし、この海を生活の場として働く人たちがいます。そうです、漁業をしている人たちです。本村の間瀬にも、ご存じのように漁港（泉宮の第二種漁港）があります。現在、三十四せき（七十二総）の船で、約七十人のみなさんが漁業に従事して新鮮な魚を水揚げしています。でも正直なところ、漁業は農業よりも経済的にも活力的にも低迷し非常に厳しい状態です。こうした状況の中、国の第四次全国総合開発計画（四全総）では、二十一世紀は海洋の時代と位置づけられ、海そして漁業への熱い視線が向けられています。今号では、本村の水産業の現状を紹介し、将来の展望——とつてはちよつと大きくなりますが、そのへんを少し探ってみようと思います。

なぜ？出稼ぎのムラだったのか

間瀬の漁業を考える場合、まずはじめに検証しなければならぬことは、「出稼ぎ」ということです。終戦後の昭和二十年代から四十年代の初めまで、間瀬は出稼ぎのムラといわれました。その理由のひとつに後継者はいても、その働く場所、つまり生活の糧を得る場所がなかったことがあげられます。

「よく問題提起をする場合に、たまごが先かにわとりが先か、というのがありますね。これはどちら

もその要素をもっていることですが、海——とくに漁業においては、

港の整備が第一です。戦後、間瀬の若い衆がなぜ北海道や青森県へ出稼ぎに行ったかという点、大きな流れの中を言えば、港がなかったことに起因するようになっています。

「母港」というように、漁師にとって港は海同様、母なる存在のもので、もつとも大事なものです。もし間瀬漁港が寺泊港や出雲崎港のように、早くから整備されていれば、そんな出稼ぎをしなくてもいい状況も、ある程度は押さえられたのではないだろうか、と

季節的にとれる魚をみてみると一年中とれるものが、ヒラメやカレイ類（くちぼスカレイ、あかガレイ、ふなべたなど）、そしてタコ、タラなどで、ハタハタなんかも年中とれる魚です。

魚といえば旬が付きもの——春は五月のイワシにはじまり、いまごろの季節は、なんととってもキスやカニが主流。秋は秋サバに代表されるサバ、イナダ、シイラなど、そして冬場はやはりタラとタコ、アンコウなどももつともポピュラーなものです。

もつとも、経営的にみると、お金になる魚と、いくらとれてもあまりお金にならないものがありまして、いわゆるドル箱は、ヒラメやタイといった高級魚ですね。

「漁業は、それこそ自然を相手に仕事をしているため、この大きな海の中に、どんな魚がいて、どれくらいとれるのか、ある程度勘が必要だね。農業と違って作り育てるものでないぶん、出漁して毎日いい水揚げがある保障はなく、簡単ないい方をすると、一つのカケ、バクチ的な面も強い仕事だね」と話してくれたある漁師さん。

そうです、漁業を考えると、この経営というのが、ほかの仕事とちよつと違って不安定な要素が多いことが最大の課題といえるでしょう。

そのため、いままでのただとる

海に生きる人人



山敏彦さん 45歳 長  
横山敏彦さん 45歳 長  
(間瀬3区丸船  
三代丸)

息子と親子船

いまNG-3という四・九九トの船で操業しています。底引き漁をやっていますが、正直なところ魚は少なくなつたね。そのため間瀬でも資源確保のため毎週休漁日を設けて保護をしています。漁業をやつていぢばいいこと？——そりゃ、なんといつても大漁のときだよ。逆に難儀な点は朝早い出漁と常に危険と背中合わせのところかな。でも自然が相手の仕事なのでむずかしい面もあるけど、それなりにやりがいはあるね。本当はもつとも大きな船を造りたかつたんだけど漁港の関係で……でも



水沢政春さん 31歳 船  
水沢政春さん 31歳 船  
(間瀬6区丸船  
み丸)

脱サラで漁師に

海っていいですよ。私は三年前に脱サラして家業の漁師をやっているんですが、会社勤めとちがいで自由があつていいですね。それに仕事は毎日同じなんです。その日によつてとれる魚、量がちがうんで、少しでも多くとろうと毎日の仕事にはりがあつた。今は昔とちがいで、休みも決まつてありますし、普通の会社員から比べるとけつこう休みも多くとれますので楽ですね。それに、もう仕事にも慣れ楽しくやつていられるんです。朝早いのがちよつとつらいですね。